

来館者の声より

ビキニデーを前に
静岡の生協の方々が来館

3・1ビキニデーを前に静岡の生協の方々が学習に訪れました。その感想の中からいくつかを紹介いたします。

生協の平和活動で3・1ビキニデーに静岡で全国の方々を迎えます。皆さんに何かお土産を一つ持って帰ってもらいたいと思いい、焼津のこと福竜丸のことを勉強しています(40代女性)

想像より大きな船でビックリです。これが本物か!と思うと不思議な気分です。

母親として子どもたちに機会あるたびに反核・反戦の大切さを話そう親たちも多くなっているかしら?(40代女性)

パネルが新しくなり、福竜丸のこ

とも判りやすくなってよかったです。ロングラップやマーシャルの展示興味深く見ました。初めて知ることたくさんありました。(50代女性)

大学生の感想文から

大学で沖繩に行き戦争や基地のことについて二年近く学んできました。ほかの地域のことほとんど知らなかったと実感しています。

世界では平和を阻害するさまざまな動きがありますが、小さいながらもそれぞれの人が平和について考え、動いていくことが、いつしか大きな力になるのでは、と思います。

入場料もなしで運営も大変かと思いますが、こうした一つひとつの努力がいつしか大きな力になることのできたらと思います。

いぬいとみこさん ご逝去

「トビウオのぼうやはびよきで

す」の作者、いぬいとみこさんが一月十六日、肺炎のため都内の病院でお亡くなりになりました。七歳でした。

この作品は、第五福竜丸の被災直後の四月二〇日に書かれました。いぬいさんは、この絵本のあとがきに記しています。

「トビウオのぼうやの病気はなおったのでしょうか?」とよく子どもたちや学校の先生から質問を受けます(略)。そうです。作者の私だって「ええ、元気になりましたよ」と答えたいのです。でも、私自身、一九五四年四月に予感して書いたように「トビウオのぼうやの病気は、なおりませんでした」とお答えするしかありませんでした。

あの第五福竜丸の無線長だった久保山愛吉さんは、四十歳でその年の九月二三日に、亡くなってしまわれました(後略)。

きょうも、展示館では子どもたちが「トビウオのぼうや」の絵本に見入り、子どもたちどうして紙芝居を読みあい真剣なまなざしです。

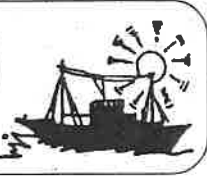


「トビウオのぼうやはどうしたの?」「どうして病気になったの?」。この作品をとおして、これら子どもたちが福竜丸に心を寄せてくれるだろうことを願いながら、いぬいさんのご冥福をお祈りいたします。

「トビウオのぼうや」絵本・金の星社刊、紙芝居は童心社刊

2002年3・1ビキニ
記念のつどい
* 2002年3月9日(土)14時-16時半
* 場所 日本青年館302号室
* 講演 山本義彦氏(静岡大学教授 / 焼津市史副編集委員長)
* 演題 ビキニ事件と日本の経済
* 参加費 500円

福竜丸だより



都立・第五福竜丸展示館 ニュース

発行 (財) 第五福竜丸平和協会
連絡所 〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

原水爆禁止運動と被爆体験の継承

沢田 昭 二

原爆が落ちた瞬間、私は爆心地から一・四キロの自宅に寝ていた。気が付いた時は潰れた家の下敷きだった。私は何とか這い出すことができたが、母は太い柱か何かに足を挟まれて、助け出せないまま火が迫ってきて焼き殺されてしまった。核兵器の使用はテロの極限である。

原子爆弾という言葉は小学生の時読んだ『子供の科学』という雑誌で見た。しかし、これと自分の上に落ちた原爆とは結びつかなかった。

私の原水爆禁止運動の原点は、一九四五年の三・一ビキニ事件である。広島大学の物理学の学生であったが、「専門にしようとする物理学が、ついに原爆の千倍もの爆発威力の水爆をつくり出した。何とかしなければ」と大きなショックを受けた。「原水爆禁止広島学生協議会」を結成して、署名運動、講演会、原水爆展の作成などに取り組んだ。

核兵器を廃絶しようという運動は日本中に広がって、草の根から国民全体を巻き込んだ日本で最初の運動となった。当時アメリカの圧力と、朝鮮戦争特需で味をしめた財界の意向を受けて、日本国憲法九条の廃止と産業の軍事化がもくろま

れていた。反核運動の広がりによって、このもくろみは頓挫し、その後の民需中心の日本経済復興につながった。

原水爆禁止運動は、見捨てられていた被爆者に生きる勇気を与えた。一九五六年、原水爆禁止運動の中で結成された日本被爆協会は、昨年の九・一一テロに対するアメリカの「報復戦争」を批判して「原爆への被爆者の恨みは底知れず深く重いものがあります。けれども私たちは『報復』を考えたことはありません。反対に、この苦しみを二度と再び他の誰にも味あわせてはならないと『ノーモア・ヒバクシャ』の声を世界の隅々にとどけてきました。」とアピールを発表した。

一九五五年、「人類という種の一人として」核兵器の廃棄と戦争の根絶を訴えた有名な「ラッセル・アインシュタイン宣言」が発表されたのもビキニ事件がきっかけであった。この宣言に込めて世界各国の科学者が集まり、核軍縮など「科学と世界の問題を討議するバグウォッシュ会議」が一九五七年以来開かれるようになった。この会議が、核兵器廃絶をあきらめて一時期「核抑止論」にとらわれていたが、その間も、湯川秀

樹、朝永振一郎、坂田昌一ら日本の科学者はこれを批判し続けた。今では原爆写真を展示して会議を開き、核兵器のない世界の実現を目指すまでになってきた。

「二一世紀の早い段階で核兵器のない世界を実現しよう」という国際政治の潮流は、一昨年の核兵器不拡散条約再検討会議で、アメリカを含む「核兵器保有国」に、「自国の核兵器を廃棄する明確な約束」をさせた。しかし、昨年登場したブッシュ政権は、この約束を反古して、テロを口実に、国連や国連憲章を無視して、核兵器も含めた軍事力で世界を支配し、多国籍企業などが、世界中から富みを吸い上げる「一國主義」を押し進めている。これに対し、世界中で急速に批判が高まっている。

核兵器も軍隊もない、自然環境を保全し、すべての人々が科学・技術の発展の恩恵を享受できる世界にするのか、それとも、環境を破壊し、戦争を拡大してまでも世界の富を収奪し続けさせるのか。二一世紀を迎えたばかりの人類社会は大きな岐路に立たされている。

被爆体験を継承し、核兵器廃絶運動を発展させるために、広島・長崎の原爆資料館と第五福竜丸展示館の役割はこれまで以上に重くなってきた。

(名古屋大学名誉教授・被爆者)

哀しい太平洋の歴史を超えて

間野千里

特定非営利活動法人アジアボランティアセンター(AVC)は、海外ボランティア団体とのネットワークを活かし、草の根レベルの人材育成と相互理解の促進に関する事業を行うことにより、環境の保全と平和維持をはかり、アジア太平洋地域の持続的な発展に寄与することを目的とするNGO(非政府組織)です。

二九の環礁と五つの島からなる太平洋の美しい島国、マーシャル諸島共和国でも活動をしています。この地はヨーロッパや日本による植民地の歴史を経て、太平洋戦争では激戦地となり、戦後、アメリカ合州(衆)国による核ミサイル「実験地」として利用され続けています。マーシャルの民は、豊かな海をカヌーで自由に往来し、自然と調和した自給自足の暮らしをしていましたが、伝統的な社会が崩壊していく過程で人口が増

え、現在、約六万人の全人口のおよそ三分の一が首都マジュロに集中しています。同国クワジュリン環礁にあるミサイル実験場使用に対する補償金や核実験による被害者に対する補償金などにより、現金収入がなければ生活が困難な社会となりました。

マーシャル諸島の人々が購入する食糧は、合州(衆)国本土や日本から輸入された缶詰や冷凍肉などです。このような偏った食生活で、栄養問題をひきおこしています。海岸に投棄された自然に還らないゴミの問題も深刻です。将来に希望を見出せず、自殺をはかたり、アルコールに依存する青年もいます。

またマーシャルの島々は平均海拔が二・五メートルほどしかなく、地球温暖化による海面の上昇で今世紀にはその八〇％が海に沈むといわれています。地球温暖

化は私たち先進国の大量のエネルギー消費をとまなうライフスタイルと無縁ではありません。

マーシャル諸島の社会が直面する課題は私たち人類の課題であること、そしてこれらの課題は私たちと歴史的に深い関わりがあるという認識に基づき、マーシャル諸島の人びとの誇りと調和の復興を願って、「環境」「平和」「人権」「教育」をキーワードに活動しています。例えば、マーシャルの青少年と共に海岸掃除をして環境教育ワークショップを開催したり、野菜を育てることによって栄養問題ひいては生活全般にわたる啓発活動を展開するなどしています。また毎夏、「マーシャル諸島・スタディツアー」で多くの市民がマーシャルの人々と交流を深めています。(二〇〇二年は八月下旬に実施予定)

日本では、「歴史」に真摯に向き合うことを知らずに育ち、物質的にとても潤沢な生活を漫然と過ごしている若者が大半ではないでしょうか。マーシャル諸島やアジアでの様々な出会いの中で、歴史と人間についての理解が浅いこと

を私自身まったく痛感し、NGOとしての役割は何か、と自問し続けています。問いは尽きることありませんが、草の根の歴史を後世に語り継ぐこと、そして地球上のどの一角に生きていようととも次世代に生命を尊重させる社会を継承することのために誠心誠意、努力することではないでしょうか。

NGOの運動は、国境を超えて市民が連帯・協働する運動です。私達の運動が悲しい太平洋の歴史を超える掛け橋でありたいと願っています。

(まのちさと・AVCスタッフ)

マーシャルでの3・1ピ
キニデーに大石さん参加

第五福竜丸元乗組員の大石又七さん(平和協会評議員)が、三月一日にマーシャル諸島で開かれる3・1ピキニデーの集会に出席するため、日本原水協が派遣する代表用に参加して渡航します。マーシャルの被害者との交流など福竜丸だよりに掲載の予定です。

第五福竜丸と ふたつの『ゴジラ』 いちだまり

「核」への怒りや憎しみが描かれているという前評判を聞いて最新作『ゴジラ』を観てきました。



映画に登場した福竜丸ポスターのイラスト

新生『ガメラ』(大映)でヒットをとばした金子修介監督によるゴジラシリーズ二五作目『ゴジラ・モスラ・キングゲドラ 大怪獣総攻撃』です。

「ゴジラ」誕生の背景には第五福竜丸被災があります。初代『ゴジラ』は「ビキニ事件」の一九五四年一月に製作公開(東宝・本多猪四郎監督)された作品で、「水爆大怪獣・空想映画」のキャッチコピーや公開前にラジオドラマ化されたこともあり、観客動員のべ九六一万人の記録を持つとか。当時は製作サイドにも観客にも、戦争の記憶と「水爆被災」の報道が生々しく刻まれていました。

映画の冒頭で被災する船は第五福竜丸を想起させますし、都電の中で交わされる「やーね。原子マゴロだ放射能雨だ、そのうえ今度ゴジラときたわ」「せっかく長崎の原爆から命拾いしてきた大切な体なのよ」との会話にはドキリとします。ゴジラ出現の由来も「密かに生息していたジュラ紀の巨大生物が相次ぐ水爆実験によってその棲家を追われて現われた」

との見解です。本作品にもそんな初代「ゴジラ」へのオーマージュが随所に登場します。

「初代」ゴジラ出現から五〇年目とされる今回は、ゴジラが第五福竜丸の母港・焼津に出現します。

「一隻の漁船が映し出される。操舵する初老の漁師に無線を聞いていた若者が告げる。「じっちゃん、ゴジラが現われたって」、

「ゴジラだっ」「こっちは近づいてるって」会話を続ける間もなぐ海が大きく揺れ、手にした通信機がほろり出される。一転カメラが港の遠景を映す。港では異変に気付いた釣りが悲鳴を上げる。巨大な波柱がせり上がり、長い長い時間をかけてゴジラの全身が現われる。やや間があって先程の漁船が天から降ってくる。白目のゴジラ。屹立する六〇メートルの巨体。憎らしい咆哮。港の事務所でも騒ぎに気付く。室内をゆっくりカメラが捕える、と一瞬壁のポスターで止まる。そこには第五福竜丸の写真、白抜きで「死の灰の記憶 原水爆のない未来を」とある。さらに左下に「第五福竜

丸を忘れてはならない」

次の場面で、これが「小川漁協」の建物であることが示されます。市場を逃げる人々、箱が投げ出されカツオが床に散乱し魚市場を踏みつぶすゴジラ……。ちなみにこの小川(こがわ)港というのは、第五福竜丸が出航した際にエンジンの部品を取りに引き返した港で今は焼津漁港「こがわ地区」と呼ばれるエリアなのです。

本作品のパンフレットで金子監督は、初代ゴジラを初めて観た時「これは戦争だ」と思ったと語っています。「五十年間実戦の経験がないことが誇りだった」と作品中「防衛軍」の軍人に言わせられた監督。アメリカの同時多発テロに乗じて法律が作られ自衛隊が海外に派兵されてしまったこの冬の現実とゴジラがオーバーラップしました。昨今のハリウッド映画でも「核使用」や核爆発シーンが安直に登場しすぎることも危機感を覚えます。核や戦争の惨禍を忘れてはならない、そんな監督のメッセージを感じました。

(第五福竜丸ボランティアの会)